

指導教員によるコメント

当該研究調査は、近代朝鮮における女性文学研究の基盤調査として行われたものである。金夏娟氏は、日韓女性文学の比較研究を博士論文の中心テーマとしているが、近代女性表現の登場に、近代的女子教育制度の確立が大きく寄与していることは言うまでもない。近代日本におけるそれは、女子教育史ならびに女性文学、さらにジェンダー研究の視点からの多様な研究成果の積み重ねがある。一方、近代朝鮮におけるそれは、とくに日本在住の研究者にとっては情報が不足しており、第一次資料にアクセスする機会も皆無に等しい。今回、海外調査の機会を得て、各元女学校の第一次資料を渉猟できたことは、今後の氏の研究にとって貴重な成果である。

さらに期待されるのは、調査対象である日帝植民地時代における朝鮮女学校における、日本人女性教師の貢献についての考察である。本学の前身、東京女子高等師範学校をはじめとして、日本近代において女子教育に携わった女性たちの中には、植民地朝鮮に赴任した者も少なくなかった。その大半は、朝鮮の日本人女学校に赴任したが、なかには、朝鮮人女学校に関わった者もいたはずである。そのような調査が展開されるなかで、植民地時代における、両国の女性同士の関係性の構築ならびにその限界が具体例とともに示されれば、これまでの日韓比較研究には完全に欠落していた、新しい視点を開拓することができるだろう。

女子教育の成立は両国の女性文学の登場・展開に必須の条件であった。と同時に、描かれる対象としての「女学生」をも誕生させた。語る主体として、また語られる客体として、教育を受けた女性達がどのように文学生成の現場に関わるのか、のみならず、領主国と植民地という支配関係の存在は、両国の女性文学の展開にどのような差異をもたらしているのか、今後の氏の研究の進展に、本調査が意味を持つであろうことを期待するものである。

菅 聡子（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 教授）